

編集後記

まさかここまでやるとは。ほとんどの日本人が思っていた正直な感想ではなかろうか。先般の女子ワールドカップでの「なでしこジャパン」の活躍には、日本中いや世界中の人々が目を見張るものであった。世界ランク4位となり上り調子にあり、善戦するであろうがまさか決勝に進出するのは。そして、一度も勝ったことのなかったアメリカチームを相手に2度のリードに追いつき延長戦をドロー、そして、PK戦を制しての優勝！あまりにも劇的結末にビックリ！！早朝6時台にもかかわらず最高視聴率27.7%、東日本大震災以降、疲弊している震災の被災者のみならず日本中の人々に不屈の闘志で勇気を与えた。焦りと緊張と極度の疲労を超越して120分もピッチを走り回り、栄冠を勝ち取った選手には頭の下がる思いでいっぱいである。

なぜ、これほどの活躍ができたのか？あらゆるメディア等でいろいろと取りざたされているが、地道な努力は当たり前のことながら、不屈の精神力と笑顔ではなかったと考える。スポーツ心理学に「ゾーン」という言葉があるらしい。過度な緊張でもリラクセーションでもない、ワクワク感や高揚感と集中力が共存する理想的な精神状態だそうだ。選手たちは、リードされている状況でも、残り時間がわずかな状況でも、手に汗握るPKの場面でもこの「ゾーン」状態だったと考えれば各選手の活躍に納得である。また、1勝勝ち進むごとにテレビの前で我々が手に汗握るとき、その緊張をよそに円陣の中にはいつも佐々木監督と選手たちの笑顔があった。専門家によれば、笑顔はリラクセーション、安心感やゆとりを与えるらしい。特に緊張が高まる状況においては、筋肉の緊張を解き良い結果を生みやすいそうだ。この「ゾーン」と「笑顔」の相乗効果で勝ち取った栄冠ではなかろうか。この優勝による「なでしこ効果」でリーグの観客動員数が増加し、国民栄誉賞も受賞し選手たちの待遇も改善され女子サッカーへの関心も急増しているが、一過性のブームに終わらずに末長く全ての人々に愛されるスポーツとして発展してほしいものである。

日本では、1960年代から70年代に掛けて、サッカー競技を行う女性が増え始め、チームができ小規模なリーグによる対戦が行われるようになり、80年に全日本女子サッカー選手権大会が始まったとのこと。ちなみに、サッカー日本女子代表（「なでしこジャパン」の愛称は、「大和撫子」ということばと「世界に羽ばたき、世界に通用するように」との願いを込めて「ジャパン」と2004年7月7日に公募により命名された。）の初の国際試合の相手は、1981年になんと台湾（チャイニーズタイペイ）であった。

そして、「なでしこジャパン」の優勝の翌日から、当協会と日本サッカー協会が共催するU18の台湾サッカー選抜チームの日本合宿がスタートとなった。このタイミングに当該事業が行われるのも何かの縁であり、この選抜チームの面々が「なでしこパワー」を吸収して、今後素晴らし選手となって世界で活躍することを期待せずにはいられない。

（経理部次長 高橋 準市）